

神様の描いた絵

ヘブル語、ヘブル文字は、聖書という書物が初めて書かれた時に用いられた言語です。これが世界各国の言語に翻訳され、私たち日本人もこの聖書が読めるわけなのですが、言語にはそれぞれ特有の趣きとといいますか、独特の表現や言い回し、隠れた意味があります。日本の俳句や短歌などを英語に訳そうとするとその良さが失われてしまうように、ヘブル語にも訳しきれない表現や意味が多くあります。ですからヘブル語で聖書を学びますと、より深くその内容に触れることができるというわけです。



בראשיתבראאלהים

אתהשמיםואתהארץ

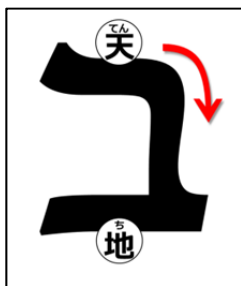
これはヘブル語で書かれた聖書の一節ですが、何と読むかといいますと…ベレーシート バーラー エローヒーム エット ハッシュャーマイム ヴェエット ハーアーレツ、これは「初めに、神が天と地を創造した。」という創世記1章1節のみことばです。このように訳すことも間違いではないのですが、実はヘブル語は私たちが使っている漢字と同じように文字の一つひとつに意味があるのです。ヘブル文字は大きく分けて23種類の文字を組み合わせる用いる言語なのですが、その一つひとつの意味を知りますと、聖書の新たな側面が見えてきます。残念ながら今回はその文字の意味のすべてをお伝えする時間は私にはありませんので、その中から一つだけをご紹介しますと思います。

ב

ヘブル語という言語は、右から左に読み進みますので、この創世記1章1節の最初の文字ベート「ב」について触れたいと思います。このベートは「家」を象った象形文字で、そこから派生して「家庭、家族」そして更に「国、国家、国民」という意味を持っています。象形文字というのは、本来「絵」として描かれたものが、情報伝達のために特化され記号化されたものですから、聖書という書物が創世記1章1節でこのベートから始まっているということは、神様は聖書という名の絵を描く時、まず一番最初に「家」の絵を描いたということになります。

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」というマタイ 6章 33節のみことばがこのベートの事実とつながってきます。つまり神様は「家」の絵、VISIONを持たれ、そして私たち人間にも、その神がお建てになる家、つまり「神の国」を第一に求めることを命じておられるのです。因みにこの「第一に求めなさい」の「第一に」はヘブル語で解釈すると「第一番目」というだけではなく「唯一の、たった一つの」という意味も持っています。つまり聖書全体、神様のご計画の全貌、神様のやりたいこと、神様の夢の全てがこのベート「神の家、神の国」にかかっているのです。

イエス様は弟子たちにこのように祈りなさいと言われました。「天にいます私たちの父よ、御名があがめられますように。御国が来ますように」と。私たちはなぜ神様を「父」と呼ぶのか考えたことがあるでしょうか。これはヘブル語でなければ理解できない謎です。ヘブル語で「父」のことをアーヴ「אב」と書きます。このようにベートの文字が使われています。そしてその隣にあるのはアーレフといい、神様ご自身を表す文字で、また「初め、第一のもの」という意味もあります。つまり神様を「父」と呼び、崇めるということはまさに「神の国を第一に求めなさい」ということを意味するのです。だからこう続くのです。「天にいます私たちの父よ、御名があがめられますように。『御国が来ますように』と。この御国が「来る」という表現もベートの中に表されています。



ベートの文字の形をよく見てください。上の棒が「天」を表し、下が「地」を表します。私たちは死んだら天国に「行く」と考えていますが、神様のご計画は「神の国がこの地に『来る』」なのです。それを指し示すためにイエス様も天から下って来てくださいました。実はこのベート、イエス様のことをも指し示しています。イエス様は馬小屋でお生まれになりました。しかし正確には洞穴です。当時のイスラエルでは、岩山をくり抜いたり、または自然の洞穴を利用してそこに家畜を入れていました。ベートの形はそれによく似ています。またイエス様は大工の家庭に育ちました。大工の仕事はベート「家」を建てることです。そして 30歳になられ、メシアすなわちキリストとしての働きを始められた時の第一声は「悔い改めなさい。天の「御国」が近づいたから」(マタイ 3:2) でした。イエス様は多くのたとえ話をされましたが、そのほとんどすべてが神の「国」に関するものでした。そしてイエス様は全ての人の罪を背負われ十字架にかかれ、死んで葬られました。岩山をくり抜いて作った墓にです。

そしてその入り口には大きな石でふたがされましたが、三日目にイエス様はよみがえられ、そのふたはどけられ、墓は今も空っぽです。ベートの文字の形がまさにそれを表しています。このようにベートはイエス様の誕生から復活までの地上における全生涯を表しているのです。

そしてこれで終わりではありません。イエス様はまたこの地に帰って来られます。実はヘブル語の文字にはそれぞれ数字が宛がわれていて、先ほどのアーレフ(א)は「初め」ですから「1」、そしてこのベートは「2」という意味を持っています。「2」つまりイエス様が十字架にかかるために一度来られ、また再び来られる、つまり二度来られることをも意味しているのです。何のために来られるのでしょうか。それはもちろん神の家、神の国をこの地に建て上げるためにです。つまり神の家、神の国とは何か、それはどのようにして建てられるのか、そしてその国に入る者たち、すなわち神の国の国民とはどのような者たちなのか、それを説明しているのがこの「聖書」というわけなのです。

ですから神の国とは比喩的なもの、象徴的で形のないものではありません。またおとぎの国のような空想の世界でもありません。現実には「来る」ものなのです。聖書が示す「神の国」こそが現実であり、今のこの世界は目まぐるしく移り変わり、やがて終わっていくものです。私たちの教会でさえ、神の家を指し示すものではあっても、所詮はその「型」にしかすぎません。しかし神の国は永遠です。そこに入る者は神様とともに永遠に生きるのです。これこそが現実であり、私たちの本来あるべき姿、神様が私たち一人ひとりを造られた理由なのです。私たちはもっとこの神様の夢、「神様のやりたいこと」である「神の国」に興味を持ち、探究していく心を持たなければなりません。

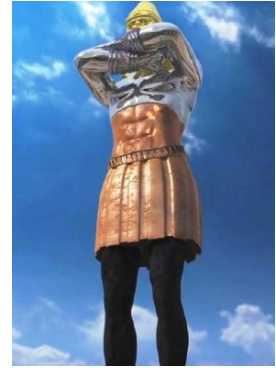
私たちは今の時代、今の自分のことばかりに興味を持ちすぎているように思っています。今という限られた時間の中で、やるべきこと、やりたいことにばかり目を向けて生きています。だから悩むのです。だからイライラするのです。だからこだわったり、受け入れられなかったり許せなかったりするのです。誤解しないでください。聖書は、私たちの幸福、利益、快適な暮らしやより良い人生のために書かれた書物ではありません。「神様にはやりたいことがある」ことを示した、神様のご計画、神様の夢が実現するという約束が記された書物なのです。

エヴェンの秘密

今回のキャンプでは「エヴェンの秘密」という題で三回お話をしました。その話の内容をあとでも思い出せるように簡単にまとめておきます。「エヴェン」とはヘブル語で「石」という意味です。אבןと書きます。

第一回目は「人手によらずに切り出された石」の話

(ダニエル書2章)です。神さまがこの世の「終わりの日」にどんなことが起こるのかを、バビロンの王ネブカデネザルの見た夢の中で示したものでした。この夢は正夢と言って将来本当に起こる出来事です。



これまでの長い歴史の中で、大きな国々が次々と興っては倒れて行きました。今の時代は「鉄とねんど」でできた時代です。強い大きな国もあれば、弱い小さな国もあります。そうした人間が建てた国を一瞬にして壊してしまう石があります。それが、「人手によらずに切り出された石」です。「人手によらない、自然のままの石」は、聖書では「完全な石」を意味します。それは何よりも力があり、一瞬にして人間の作った国を打ち壊して、神の国を打ち建てることのできるのです。

どうしてその石にそんな力があるのでしょうか。それはヘブル語の石が「エヴェン」だからです。エヴェンというヘブル語は、御父「アーヴ」と御子「ベーン」が組み合わさった言葉だからです。そしてこの石はやがて再びこの地上に戻って来られるイエスさま(=メシア・イエシュア)を指し示しているのです。そしてこの地上に神の国(神の支配=天の御国)を打ち建てられるのです。



第二回目は「巨人ゴリアテを倒したダビデの石」の話 (Iサムエル記17章)です。ダビデは川の中から五つの石をとって、石投げでペリシテ人ゴリアテに立ち向かい、最初の一発で倒しました。この戦いはいったい何を意味しているのでしょうか。「五つの石」は神のみおしえである「トラー」(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)のことです。ダビデが投げた最初の一つの石は、神の「トラー」(תּוֹרָה)を代表する石なのです。「トラー」は「神のことば」とも言えます。この世は神のことばの力を知りません。神さまを信じる人は、この神のことばである「トラー」なしに、この世に打ち勝つことはできないのです。ですから、もっともっと神さまの「トラー」を学ばなければならないのです。やがて来る神の国は「ダビデ王国」とも呼ばれます。なぜなら、それは神の「トラー」によって支配される国だからです。

第三回目は「石の枕で夢を見たヤコブが記念とした石」の話 (創世記28章)です。ヤコブは父母に祝福されて自分のお嫁さんをさがすためにハラ



へと向かいました。その旅の途中、石を枕にして寝ていると、不思議な夢を見たのです。それは天から地に向かってかかっている梯子でした。その上を御使いたちが、そしてそのかたわらに主がおられたのです。そんな夢を見たヤコブは、ここは「神の家」だと言って、枕にしていた石を立てて記念とし、その場所を「ベテル」(「神の家」בֵּית-אֵל)と名づけました。ヤコブは

ここで神のご計画を知らされたのです。つまり、神さまがやりたいことは、神と人とがともに住む「神の家」を造ることだと悟ったのです。とはいえ、ヤコブはそのことをそのときには十分に知ったわけではありません。ヤコブから生まれ出るイスラエルの民をとおして、そのことが少しずつ、明らかにされていきます。そして、そのイスラエルから家を建てる上でなくてはならない「ひとつの石」(「エヴェン」、「頭石」、「要石」とも言われます)が、神によって置かれるのです。その石こそメシアなるイエス(イエシュア)なのです。

最後に、以下の聖書箇所も調べると、神が備えられた「石」についてもっと深く学ぶことができます。おも

- (1) イザヤ書 28章 16節
- (2) 詩篇 118篇 22~24節
- (3) ローマ人への手紙 9章 33節
- (4) ペテロの手紙第一 2章 6節

今回学んだ「エヴェン」の秘密、忘れずにしっかりと心に刻んでおきましょう。

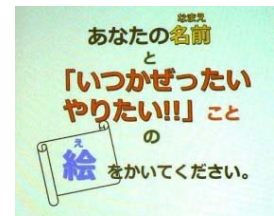
とくべつしょう オール特別賞

今回のキャンプに参加した子どもたちはいずれもみな個性的です。
その中で「オール特別賞」を受賞した三人の子どもたちがいます。
この特別賞は、オール先生を特別に驚かした子どもたちに与えられました。

ゆめ しょう おなが らみ 【主が夢をかなえてくださると信じま 賞】・翁長 来道くん



最初のプログラム、「いつかぜったいやりたい!!」ことの中で、来道くんは、「聖書を翻訳したい」と語りました。そんな夢を持っている中学生がいることをこれまで聞いたことがなく、とても驚かされました。必ずや「主が夢をかなえてくださると信じましょう(賞)ね」。



たも しょう かんた れい 【そのレベルをぜひ保ちま 賞】・・・神田 礼くん



今回のキャンプで「はじめてメッセージやってみた」で、昨年夏の修養会のキッズ・プログラムで暗唱した聖句の中にあつた「永遠のいのち」の意味について取り組みました。初めてのメッセージとしては上出来でした。これからも「そのレベルをぜひ保ちましょう(賞)ね」。

すてき しょう 【かもしかのように素敵なステップで主を賛美しま 賞】

・・・ につた りゆな
新田 琉奈さん



こうれい
恒例のイスラエルダンスで、かもしかのように軽やかなステップで踊る琉奈さん。その姿は御国の喜びと楽しみを彷彿とさせました。これからも「踊りをもって主を賛美しましょう(賞)ね」。

